

水俣曼荼羅

MINAMATA Man dala

原一男監督 最新作

『ゆきゆきて、神軍』

悶え神、
悶えて加勢する。
自分は何もできないから
せめて水俣の人々と嘆き、
悲しみを共にしよう。

——石牟礼道子

372分で物語る、20年の時と場所



第1部●「病像論」を糾す | 第2部●時の堆積 | 第3部●悶え神

監督：原一男 エグゼクティブ・プロデューサー：浪越宏治 プロデューサー：小林佐智子、原一男、長岡野亜、島野千尋 編集・構成：秦岳志 整音：小川 武
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業）、独立行政法人日本芸術文化振興会
製作・配給：疾走プロダクション 配給協力：風狂映画舎（2020年/372分/DCP/16:9/日本/ドキュメンタリー） ©疾走プロダクション

自主上映会 + 原一男監督トークイベント

- 日時：2024年12月22日（日）
開場9時、開演10時、終了19時15分予定

- 会場：北海道大学 学術交流会館 小講堂

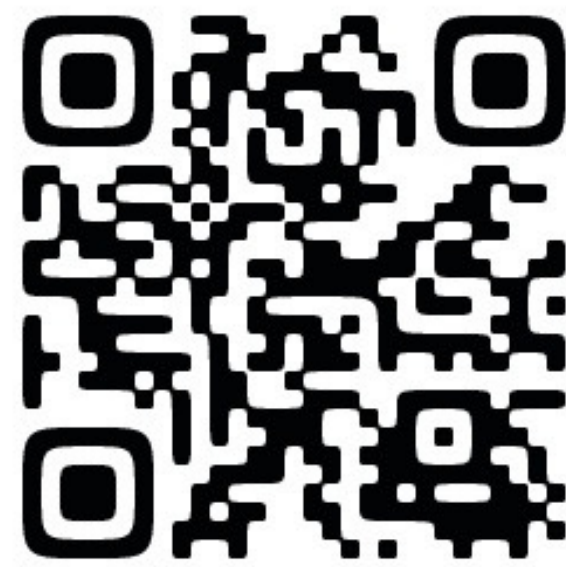
- 料金：一般 2,000円 学生 1,500円

※上映にかかる費用の一部をカンパや協賛金で負担しているため、通常の半額に近い料金でご覧いただけます。

- チケット：peatixにて販売／当日販売

※ 定員180名に達し次第、締め切らせていただきます。

▼チケットはこちらから



Peatixサイト：

<https://bit.ly/4dWhTIU>

札幌の劇場で一度上映された後、3日間限定の上映会で上映されてからは一度も観ることができなかった、鬼才・原一男監督の最高傑作。待望の再上映！

20年もの歳月をかけて製作された『水俣曼荼羅』。6時間12分の映像が映し出す、水俣病事件にかかわるさまざまな人びとの、それぞれの物語——。人と社会の複雑さと奥深さが描かれる。

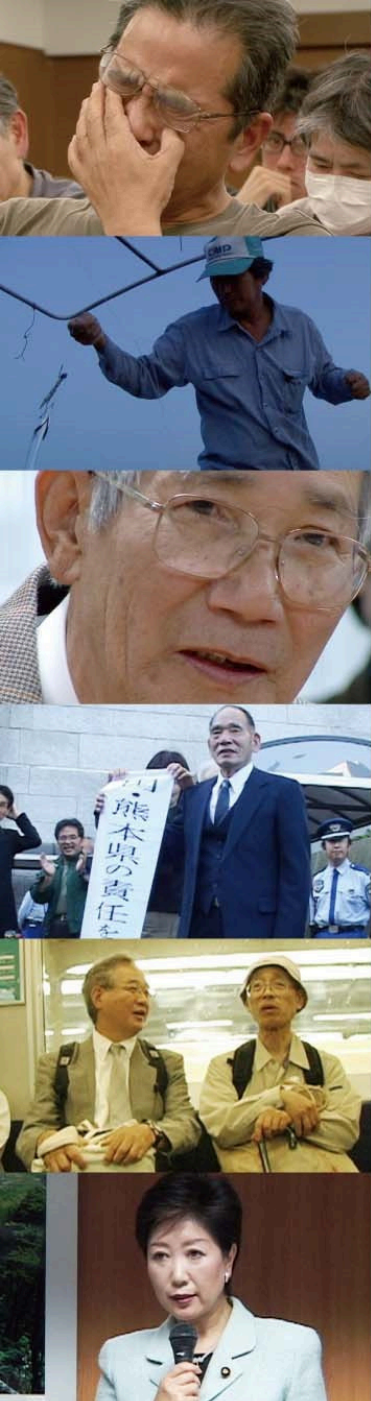
主催：北海道大学大学院文学研究院笹岡正俊研究室

後援：日本平和学会北海道東北地区研究会、さっぽろ自由学校「遊」

お問い合わせ：hokudai.minamata@gmail.com | Facebookで発信中！<https://bit.ly/48dihBC>

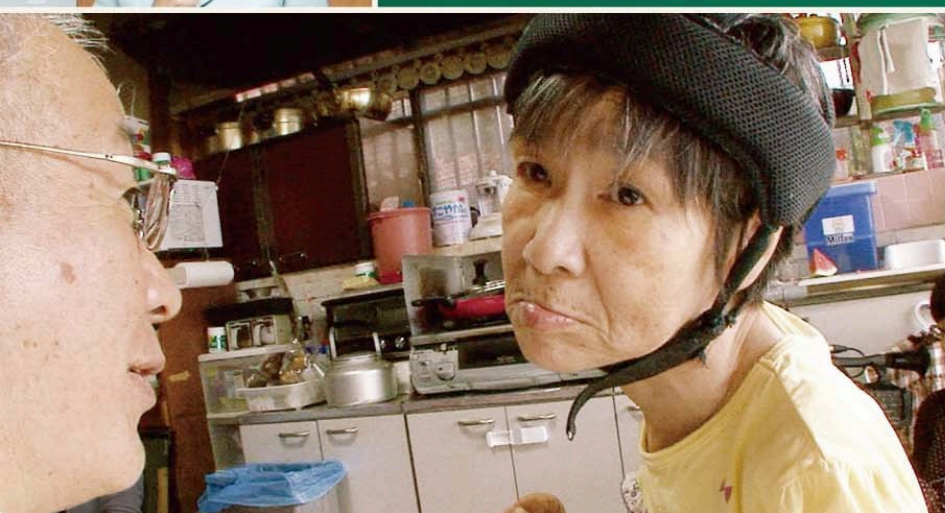
Facebookはこちらから▶





2004年水俣病関西訴訟 最高裁判決の日から 撮影はスタート。

「水俣はもう終わった」そう言われる中、唯一和解を拒否して裁判闘争を続けてきた水俣病関西訴訟が、ついに最高裁勝訴判決となり、奇跡的に水俣裁判闘争が息を吹き返した。補償をめぐるはまだ裁判の続く中、国の患者認定の医学的根拠が覆され、新たな水俣病像論が確立。その画期的な展開にたどり着いた医師たちにもカメラをむける。そして、水俣の海を見たいという探求心から、監督自ら海中撮影に挑戦する。揺るぎない闘志、逡巡と葛藤、折りとし…語りつくせない言葉や水俣の「いま」を生きる人々の顔が迫りくる。デビュー作『さようならCP』（72年）で脳性麻痺の人たちを執拗なまでに撮り続けた鋭敏な視線は変わることなく、そこに監督としての円熟味を重ね、重層的な「人間曼荼羅」が大河となって、母なる不知火海に注ぎこまれていくのである。



原一男の
あらたな代表作が生まれた

『ゆきゆきて、神軍』の原一男が
20年もの歳月をかけ作り上げた、372分の叙事詩
『水俣曼荼羅』がついに、公開される。
世界的ドキュメンタリスト・原一男が最新作で描いて見せたのは、
あの水俣だった。

日本四大公害病のひとつ、水俣病。
いまもなおこの場所には、病が濃い陰を落としている。
不自由なからだのまま大人になった胎児性、あるいは
小児性の患者さんたち。
末梢神経ではなく脳に病因がある、
そう証明しようとする大学病院の医師。
病をめぐって様々な感情が交錯する。
国と県を相手取っての患者への補償を求める裁判は、
いまなお係争中だ。

そして、終わりの見えない裁判闘争と並行して、
何人もの患者さんが亡くなっていく。
しかし同時に、患者さんとその家族が暮らす水俣は、
喜び・笑いに溢れた世界でもある。

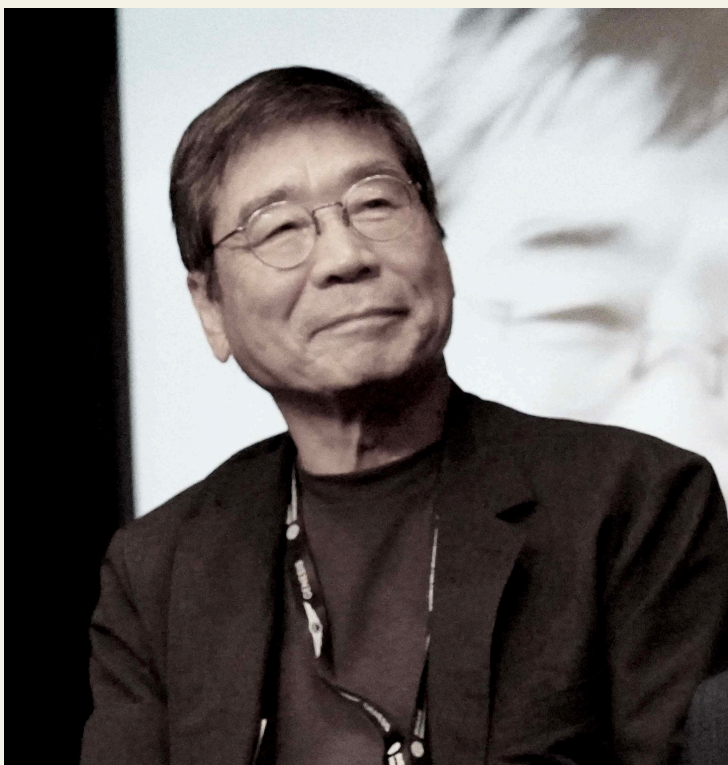
豊かな海の恵みをもたらす水俣湾を中心に、幾重もの
人生・物語がスクリーンの上を流れていく。
そんな水俣の日々の営みを原は20年間、じっと記録してきた。

「水俣を忘れてはいけない」という想いで
―― 壮大かつ長大なロマン『水俣曼荼羅』、
原一男のあらたな代表作が生まれた。

おわらない世界の海、



「水俣曼荼羅」原一男監督からのメッセージ



この作品を作るにあたり、私は二つの課題に直面した。一つは、水俣病の闘争が停滞気味のなかでは闘争からエネルギーをもらうことは能わず、逆に、その闘争を刺激するパワーある作品を作らなければならないという課題。もう一つは、すでに水俣病を描いた傑作群が存在するなかで、これまでに描かれたことのない新しい切り口を見つけなければならないという課題だ。

ここに、私が試行錯誤の末に出した答えに辿り着くためのヒントのようなものを記しておきたい。一つはこのタイトル。これに20年以上の時間をかけた苦悩が凝縮されている。それはどういうことか？そしてもう一つ。私はこの作品をエンターテインメント・ドキュメンタリーと呼びたいと思っている。なぜか？この作品をこの二点に沿って読み解く作業は、ゲームのようなものだと思っている。かなり高度な知的なゲームなので、じっくりと構えて取り組んで欲しい。そんなふうに読み解く作業が、つまりは、この作品を理解するということだと思っている。

以上の問いかけへの答えのようなものは、当日、トークの場でお話ししたいと思っています。

原一男（はら・かずお）

1945年山口県宇部市生まれ。ドキュメンタリー映画監督。1972年『さようならCP』で監督デビュー。今村昌平・浦山桐郎監督、カメラマンの姫田真左久に師事。主な監督作に『極私的エロス・恋歌1974』（1974年）、『ゆきゆきて、神軍』（1987）、『全身小説家』（1994年）他、がある。2024年10月、ラヴェンナ・ナイトメア映画祭にてゴールデンリングを授与される。現在は『水俣曼荼羅Ⅱ』を撮影中。近く、『水俣曼荼羅Ⅱ』製作費クラウドファンディングを立ち上げる予定。

【上映会プログラム】

開場	9:00~
第一部上映	10:05~12:00（115分）
お昼休憩①	12:00~13:00
第二部上映	13:00~15:18（138分）
休憩②	15:18~15:30
第三部上映	15:30~17:30（119分）
休憩③	17:30~17:40
原監督トーク	17:40~19:10（90分）

【会場案内図】

